

# 鼠山感応寺本堂の建築について

## — 身延山久遠寺祖師堂から辿る —



AK14036 切刀 悠

### Keywords

鼠山感応寺 身延山久遠寺 比企谷妙本寺  
池上本門寺 日蓮宗 古材

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景・目的

日蓮宗総本山身延山久遠寺では、全山が焼失した明治大火を機に久遠寺における伽藍の形態は大きく変化している。明治大火前の建築の規模は祖師堂が最も大きく、中心堂宇と呼ばれる三堂(祖師堂・本堂・御真骨堂)のなかでも中心に据える伽藍配置は、祖師信仰のある日蓮宗独自の特徴であったが、明治大火後に鼠山感応寺の古材を使用し再建した祖師堂は以前より規模が縮小している。それによって大本堂は現在の伽藍内では最大となり、日蓮宗の伽藍の特徴が失われた。

今回の研究では、久遠寺伽藍の最大の転換期に使用された鼠山感応寺の古材に注目し、徳川幕府の庇護を受けながら5年しか存在しなかった幻の寺とも呼ばれる鼠山感応寺本堂の3D復元を、現在の身延山久遠寺祖師堂の建材や歴史資料から試みる。

### 1.2 研究方法

- ①実測調査及び図面作成
- ②文献による分析・考察
- ③既往研究を用いた分析・考察
- ④autoCADを用いた3D復元
- ⑤久遠寺祖師堂との比較・分析

## 2. 身延山久遠寺について

### 2.1 身延山久遠寺概要

身延山久遠寺宗祖日蓮が開山し、大部分が山岳地帯を占める身延町西北部の身延山の中に建立する日蓮宗の総本山である。周囲には懐深い山々が連なっているため太平洋沿岸からの湿った空気が冷えて多量の雨をもたらす。よって、地質的条件や気候風土は建築には適していないことが伺えるが、その反面土壌の空気や水の流通が良好で宗教的景観が良いことや、杉や檜などの良質な建築資材を得やすいことがあげられる。

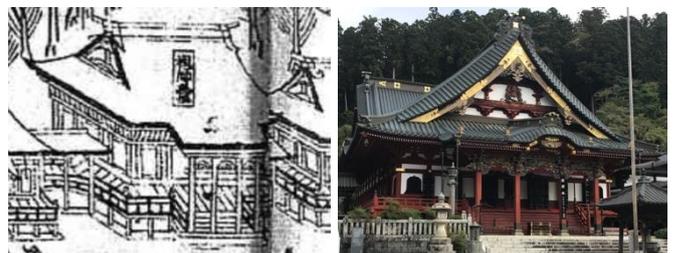
創建年は1281年。富士川支流の波木井川を北上すると総門、三門の先に主要伽藍が並び立つ。三門の西方を入ると「西谷」、東方の山裾には「東谷」、背後の山中・山上に「奥の院」の諸建物で構成されている。幾度に渡る天災、人災による損壊、再建を経て現在に至る。

### 2.2 祖師堂について

表1 久遠寺祖師堂の歴史年表

元号	西暦	事柄
弘安4年	1281	十間四面の大坊を建てる
明応7年	1498	身延山地震により祖師堂、他諸堂宇壊滅
永正16年	1519	十九間四面で建立
文政7年	1824	祖師堂天井より出火。祖師堂、他諸堂宇焼失
文政8年	1825	再建。入仏式をおこなう
文政12年	1829	五重塔より出火。祖師堂、他諸堂宇焼失
天保元年	1830	再建。上棟式をおこなう
明治8年	1875	大火により、祖師堂、他諸堂宇焼失
明治14年	1881	十二間二十間で再建

現存している祖師堂は明治大火直後に復興計画された堂宇であり、明治11年(1878)に建て方が始まり、明治14年(1881)に竣工。焼失前の祖師堂とは異なった容姿で再建されている。再建された祖師堂は桁行7間、梁行12間、十二間十九間以上ある奥行きのある外形である。また屋根形状は善光寺建築にみられる撞木造であり、通常の寺院建築においては珍しい形である。



左:図1 宝永年代絵図の祖師堂

右:写真1 現在の祖師堂

文政7年、12年と火災が相次ぎ、諸堂宇再建のために大量の木材を伐採していたことや、明治維新での寺地接収により、資材を自領より調達するのが困難であった。そんな中で差し迫った明治14年の宗祖600年遠忌に間に合うように、再建に使用した材は妙本寺に保存されていた感応寺本堂の古材だった。鎌倉比企谷妙本寺所蔵の『身延山行材木船積込帳』によれば、柱や梁のほか扉・

敷居から天井の格縁や小物に至るまでの相当量の古材が満載された5隻の船で妙本寺から久遠寺まで海上輸送されたことが記載されている。現存の祖師堂の70本ある柱のうち48本は感応寺の古材である。

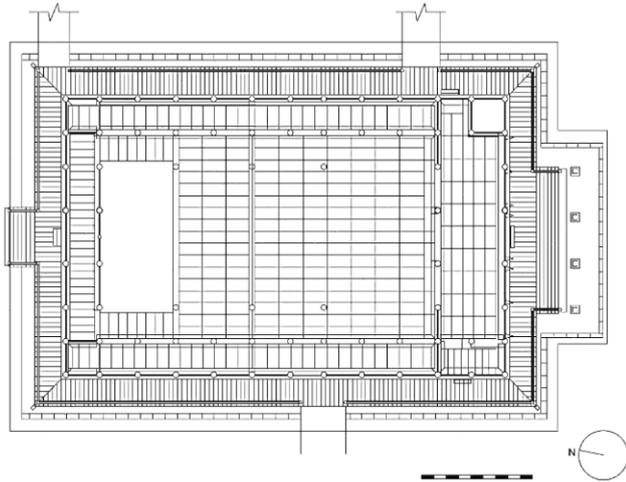


図2 久遠寺祖師堂平面図

### 3. 現地調査

#### 3.1 調査概要

##### (1)身延山久遠寺

調査内容:実測、見学

調査日:2017年8月4, 5日、10月24日

##### (2)池上本門寺

調査内容:実測、見学

調査日:2017年11月21日

#### 3.2 調査結果

##### (1)身延山久遠寺

現存の久遠寺祖師堂では、感応寺時代の遺構を多く目にすることができる。

内部を見ると、蔵手の形状より虹梁も感応寺古材だと判断ができる。外陣虹梁は『身延山行材木船積込帳』の記載から5本が持ち込まれていることがわかるが、久遠寺祖師堂では6本確認できるため、1本は再建時の新材により似せて作られていることが推察できる。

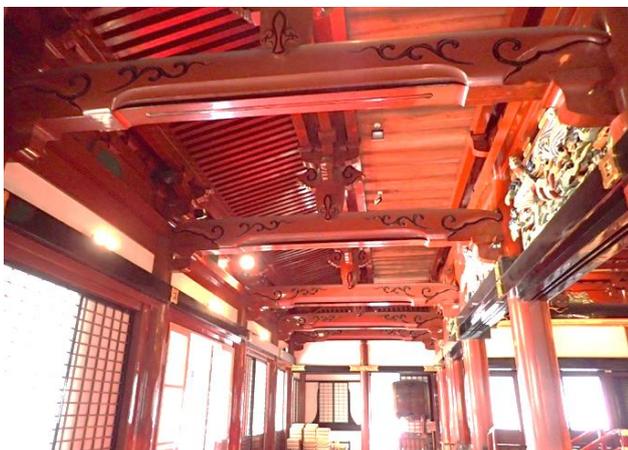


写真2 久遠寺祖師堂外陣

また、外陣と内陣を隔てる柱にはそれぞれ面取りがしてあり、両脇2間の中敷居には2本の溝があることから、感応寺時代には建具が嵌め込まれていた。久遠寺祖師堂では無目敷居の中央間も鴨居には2本の溝が刻まれていることから、両脇同様、感応寺本堂では中敷居があり、建具が嵌っていたと思われる。さらに『身延山行材木船積込帳』では、七尺五寸の中敷居2丁が確認されることから、現在格子戸が嵌っている両端の2間も中敷居があり、外陣と内陣以降を明瞭に隔てる結界が存在していたと推測される。これは日蓮宗の祖師堂における特徴の一つである。



写真3 久遠寺祖師堂内外陣境

床下では、感応寺から転用された柱に墨書で「身延山行鎌倉出」と大きく記されていることが確認出来る。感応寺当時弁柄漆塗痕跡もあることから、内々陣では一尺上がっているものの、感応寺本堂と久遠寺祖師堂の床高が同じであることを示している。また、天井裏の柱端にも同様の跡があることから、天井高も感応寺本堂と同値である。天井裏の柱梁は潤沢な資材を使用した感応寺の荘厳さを感じ取れる直径80cmはあるであろう檜の丸太がほぼ全体に使用され巨大な屋根を支えているが、後陣寄りの柱には細い新材が多く、再建時の苦勞が伺える。



左: 写真4 久遠寺祖師堂床下

右: 写真5 久遠寺祖師堂天井裏

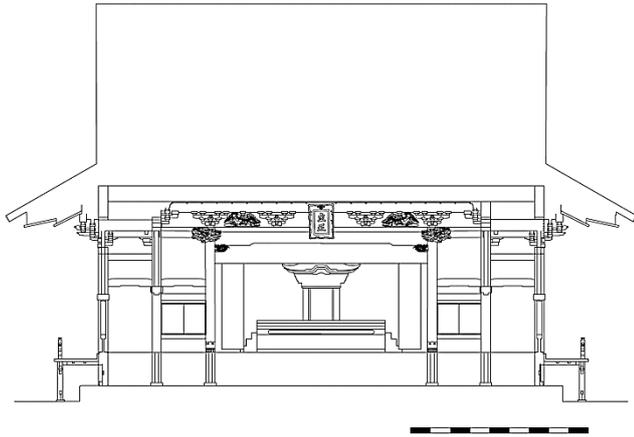


図3 久遠寺祖師堂断面図

(2)池上本門寺

感応寺棄却時に多くの廃材を引き取った比企谷妙本寺を末寺とする池上本門寺には、現在も感応寺本堂の古材が保管されている。

その一つである双折棧唐戸は、現在久遠寺正面に取り付けられている双折棧唐戸と同一のものと判断できる。平成元年からの大修繕により久遠寺祖師堂の建材は新しく塗り直されているが、黒漆で全体を覆い、各棧の内面を朱漆で彩っている着色は、本門寺が所有するものと同じである。



左:写真6 久遠寺祖師堂双折棧唐戸

右:写真7 本門寺所蔵の双折棧唐戸

完全な形で残る懸魚は、遺る史料がほぼない感応寺本堂の屋根部を知るための大きな手がかりとなる。久遠寺祖師堂は前述の通り特徴的な屋根形状をしており、『身延山行材木船積込帳』にも一切屋根部材の記述がないため、感応寺古材を使用しているとは考え難い。同様に墓股も、現在見てとれるものとは形状が異なるため、久遠寺にて新材を用いて作製されたと思われる。



左:写真8 本門寺所蔵の懸魚

右上:写真9 本門寺所蔵の墓股

右下:写真10 久遠寺祖師堂の墓股

## 4. 鼠山感応寺について

### 4.1 鼠山感応寺の概要

鼠山感応寺は寛永8年(1631)から続く新寺建立禁止令下において、特例として天保7年(1836)に建立した日蓮宗の寺である。將軍家の後ろ盾をもつ伽藍は莊嚴であり、早々から門前町も形成された。祈願寺として將軍家、御三家大名らの参詣を集めたが、わずか5年後の天保12年(1841)、將軍の「思召」により廢寺となった。

もともと谷中にあった感応寺は不受不施を理由に幕府から弾圧を受け、元禄11年(1698)天台宗に改宗。それ以後、日蓮宗では感応寺の日蓮宗への復帰願いが本門寺から出されていた。將軍徳川家斉の側室で日蓮宗・中山智泉院の僧日啓の実子で自身も熱心な日蓮宗の信徒であったお美代の方は、將軍家斉を動かし、ついに天保4年(1833) 感応寺の日蓮宗復帰が認められる。しかし谷中の寺は天台宗として残し、寺名も長耀山感応寺から護国山天王寺に改号した。感応寺の名前を継いだ長耀山感応寺には現在の目白4丁目付近にあったとされる磐城平藩安藤対馬守の下屋敷跡地、28,642坪が提供された。この別名が鼠山感応寺である。

將軍職を退いてなお実権を握っていた家斉が死去すると、12代將軍家慶の老中水野忠邦は天保の改革の一環として感応寺を破却を命じた。この際、堂宇のほとんどを取り壊されたが、鼓楼等は池上本門寺、祖師堂・庫裏等は鎌倉比企谷妙本寺に移築された。これらの遺構は火災、関東大震災等で現存していない。

幕府より3間四面堂以上の規模を持つ堂宇の建立は法規により禁じられており、本堂は規定以上の堂宇であったため、そのままの建立は認めないという内示があったが、妙本寺釈迦堂に使用することを名目にしたところ特別に許可され本堂の解体材は舟運を利用して鎌倉に運ばれた。しかしながら、当時の比企谷釈迦堂は建立して間もない堂宇であったこともあって、多額の出費を伴う再建は断念し、結果として感応寺本堂の古材は比企谷に保管されることになった。

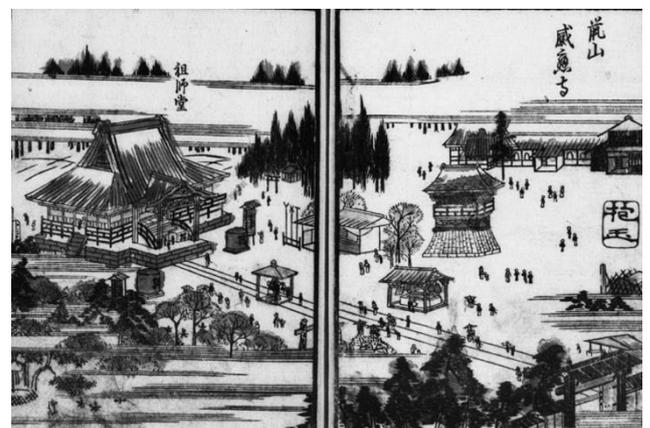


図4 『東都本化道場記』挿絵

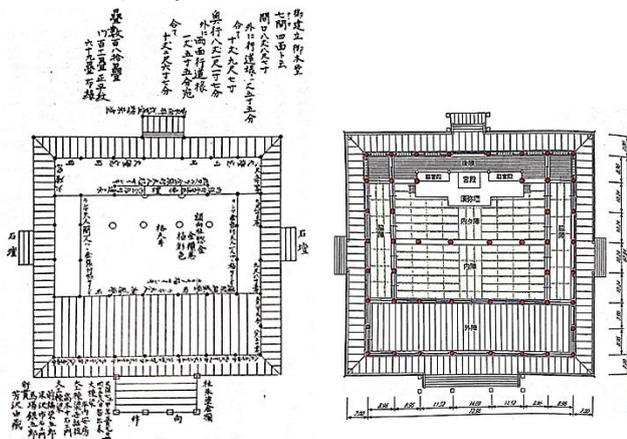
## 4.2 感応寺本堂について

感応寺本堂の平面図は雑司ヶ谷村名主が編述した『櫛楓』所載の挿絵から大概を知ることができる。図5『櫛楓』での記載には、「間口八丈八尺七寸、奥行八丈一尺一寸七分、その周囲に一丈五寸五分幅の縁を巡らす」という総寸法が書かれているものの、その総寸法と図面内の各柱間に註記されている寸法を比べると、大きな誤差が生じるため、寸法値はあまり参考にならない。

現存の久遠寺祖師堂や『身延山行材木船積込帳』では、比企谷より身延山に送付された感応寺本堂円柱の数は48本であることが確認出来る。『鼠山感応寺』によると『櫛楓』における平面図は柱の書落としがあり、本来の内陣奥行きを四間とすると、7間四面という図5内の説明とも合致する。これを元に、前述の通り久遠寺祖師堂外陣内陣脇陣の虹梁や建具などが感応寺古材であることから、柱間寸法は同じであるとみると桁行は決まる。梁行は感応寺記述のある瓦版と比較すると、後陣の寸法がわかるため、通例は同寸法とされる外陣寸法も決まる。これを総寸法から引くと中央4間の寸法が判明する。図6はこれらの情報を元にした渡辺宏氏の復元図である。

高さ寸法は調査結果から、屋根部を除き久遠寺祖師堂と同等とする。

外観については、図4『東都本化道場記』から入母屋造で正面に唐破風の向拝があることが見てとれる。葺材は同録の他寺の挿絵同様瓦葺として描かれているが、『東都本化道場記』は1831年から1889年にかけて作成されているため、『櫛楓』同様廃寺後に描画された可能性も否定できない。現状、感応寺本堂の葺材は一切伝存せず、法華宗の同規模堂宇では柿葺などが多く使われていることから、感応寺本堂も植物性の葺材であった可能性がある。平成5年の発掘調査では旧感応寺境内遺構に近い徳川ドームトリーより丸瓦11枚が出土しているが、草木・茶碗一つにしても徹底的に棄却された感応寺伽藍のものであるとは考え難い。



左：図5 『櫛楓』挿絵の感応寺本堂平面図

右：図6 感応寺本堂復元図

## 5. 3D復元

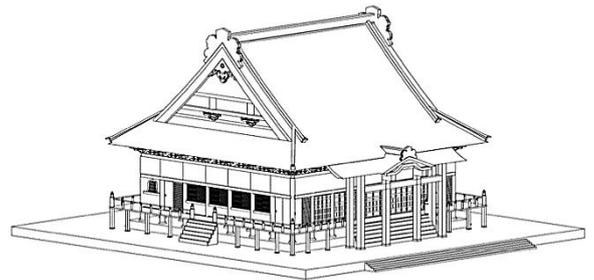


図7 上空パース



図8 復元感応寺外陣パース



図9 復元感応寺正面外縁

## 6. まとめ

久遠寺祖師堂は多くの感応寺本堂の古材を使っていながら全く異なる形で再建されたにも関わらず、感応寺建立当時の様子を伺い知れるものが多く、感応寺伽藍の主要堂宇唯一の遺構として大変貴重である。

3D復元をした結果、現在の久遠寺祖師堂外陣部分はかなり感応寺本堂と近い形で建てられていることがわかる。また、現在の久遠寺祖師堂では見ることでできない日蓮宗祖師堂の特徴が復元した感応寺本堂では確認できる。しかし屋根部分に関しては多くの検証の余地がある。

### 参考文献

- 1) 2014年度芝浦工業大学院修士論文『近現代における身延山久遠寺に関する研究』 竹下宗隆 2015年3月
- 2) 江戸西北郊郷土誌収録 『櫛楓』 新編若葉の梢刊行会 1958年
- 3) 『旧感応寺境内遺跡発掘調査報告』 旧感応寺境内遺跡発掘調査団 1994年
- 4) 『特別展鼠山感応寺図録』 池上本門寺 2011年
- 5) 『鼠山感応寺』 日本女子大学総合研究所 2015年
- 6) 『身延山祖師堂』 身延山久遠寺 1994年